



ライの物語

やる気出ない病
～克服術～

【第2弾】

じーん澤田

「ライ、何をしてるんだ？」

「おはよう、赤リボン。みんなが心穏やかに暮らせるように、大切なことに気づいてもらうための物語を書きたいと思っているんだよ。」

「ふ～ん、でもなんか乗り気じゃないみたいだね。」

**赤リボンは僕の心を傷つけていた見えないやりだ。
僕の気づきから、思いやりに変化し、やりがいに進化した。
いまでも、時々姿を現しては、僕に話しかけてくる。**

「そうなんだ。みんなに伝えたいことがあって、こうやって机に向かうんだけど、どうもやる気が出なくて全然進まないんだ。」

「おっ、みんながハマる、『やる気でない病』だな。」

「えっ、そうなの。これってよくあることなの。」

「よくどころか、『やる気でない病』で困っている人は、世界中に溢れているよ。みんな、解決策も分からないしね。」

「赤リボンは解決策を知ってるの？」

「あ～、知ってるよ。教えてあげようか。」

「えっ、ホント。教えてよ。」

「俺様の授業料は高いぞ。」

「え～、そんなこと言わないでさ。教えてよ。」

「仕方ない。他でもないライの頼みだ。教えて上げるよ。ライ、そもそもやる気って、何だか分かるかい？」

「やる気？ やりたいと思う気持ちじゃないの。」

「そう、そのとおり。」

「やった！・・・でも、そのまんまじゃん。」

「ライが、みんなの役にたとうと、物語を書こうとしている今の状態は、やる気になってる・・・って、感じじゃなくて、『その気』になった・・・って、感じだな。」

「その気？」

「そう、その気はその気。やる気ほどエネルギーがないから、ぜんぜん作業もはかどらないんだ。」

「やりたい・・・とは、思ってるよ。」

「もっと、心の底からやりたいと思わなきゃ、やる気のエネルギーは出てこないんだよ。」

「じゃあ、どうやったら、今のその気の状態から、もっとやる気になれるのさ。」

「どうしてライは物語を書きたいと思ったんだっけ。」

「みんなに喜んでもらいたいからだよ。」

「そうだろ。だったら、みんなが喜ぶ姿をもっとイメージしなくちゃ・・・。」

「みんなが喜ぶ姿・・・！？」

「そう、みんなが喜ぶ姿。みんなが喜ぶ姿を、目を閉じて想像してみな。」

ライは目を閉じて、みんなが喜ぶ姿を想像してみた。

「いいね。ライ、いい感じだ。」

ライの表情が明るくなってきたのがよく分かる。

「すごく、うれしそうな感じだね。」

「うん、そうだね。みんなが僕の物語を読んで喜んでくれるイメージをしていたら、なんだか、すごくうれしくなってきたよ。」

ライは目を閉じたまま、まぶたに浮かぶイメージを話し始めた。

「みんな、心穏やかな表情をしているんだ。
中には僕に『ありがとう』って、言ってくれる人もいるし、
『素晴らしい物語だ!』って、握手を求めてきてくれる人もいる。
『心が軽くなりました。』って、涙を流してくれる人もいるよ。
ぼく、うれしくなっちゃったよ。」

「いいね、ライ。上出来だ。それだけ妄想ができれば、完璧だよ。」

ライは目を開けて、照れ笑いをした。

「そうだね。ものすごい妄想だ。」

「どうだい、ライ。喜びのイメージをすると、とってもいい感じだろ。相手の役に立ち、相手が喜んでいるイメージができれば・・・、今、どんな感じだい。」

「う～ん、そうだな。なんか、やる気になってきたよ。」

「そうだろ、やる気になってきただろう。」

「うん、やる気が出てきた」

「自分が心から喜べることは、誰だって、やる気になるものさ。」

「ホント。物語を書きたくてウズウズしてきたよ。なんか、いい物語がかけそうだ。赤リボン、ありがとう。僕、書くね。」

~~~~~

「ライ、どうだい。やる気一杯になって、もう書き終わっちゃった？」

「う～ん。」

「あれ、どうしたんだ？あんまり、はかどってないみたいだね。」

「う～ん、いざ書き出してみたら、なかなか難しいんだ。物語を書くなんて、やっぱり僕にはまだ無理なのかな。」

「なんで、そう思うんだ。」

「きっと、読んだ人に、文章の構成がなってないとか、言われちゃうじゃないかと思うと、だんだんやる気がなくなってきちゃったんだ。」

「力不足ってことか。」

「そうだね。」

「でも、ライ。力不足はいつまでたっても解消されることはないんだよ。分かる？」

「そうなの。頑張っていれば、いつかは自分も実力がついてくるんじゃないの。もし、そうじゃないなら、なおさら、やる気にならなくなっちゃうよ。」

「実力はずくだらうけど、力不足は解消されないよ。だって、自分のレベルが上がれば、より高いレベルが見えてくるだろ。」

「たしかに。」

「力不足を感じて、立ち止まってしまう人は、どんなに実力が上がっても、またその時に、力不足を感じてしまうんだよ。考え方は変わらないからね。」

「たしかに、そうかもしれない。」

「これが『やる気でない病』を生み出す、もうひとつの理由でもあるんだ。」

「『やる気でない病』になってしまう理由は、ひとつに、達成した喜びのイメージができていないこと。そしてもうひとつの理由は、目指すものの、そもそもの目的を見失っていることによるんだ。」

「どういうこと？」

「つまり、ライは力不足から、みんなに認めてもらえるような、上手な文章が書けないんじゃないかと思い、みんなに非難されるんじゃないかと、怖くなってきてしまったわけだよね。」

「うん、そうだ。そのとおりだよ。」

「ライは、みんなに認めてもらいたいから、物語を書き始めたんだっけ？」

「・・・」

「何で物語を書いているか、思い出してみなよ。」

「え〜と、・・・みんなに喜んでもらいたいからだ。」

「そうだろ。みんなに認めてもらいたいからじゃなくて、みんなに喜んでもらいたいからだろ。」

「うん、そうだ。」

「じゃ、文章が上手いか下手かなんて、どうだっていいじゃないか。伝えたいのは、ライの文章のすごさじゃないよね。みんなが心穏やかに暮らせるように、大切なことに気づいてもらうための物語を書きたいんだろ。」

「そうだった。忘れていたよ。」

「ライが伝えたい大切なことは、文章力じゃなくて、想いの強さで伝わるんだよ。」

「そうか、そうだよね。……でも、文章がうまい方がもっと伝わるんじゃないかな。」

「それはそうだ。でも、今、いろいろ悩んで困っている人が、世の中にはたくさんいるんだよ。ライが文章うまくなるまで、その人たちには待っててもらうのかい？」

「いや、早く物語を読ませてあげたいよ。」

「そうだろう。今、できることをして、将来、文章が上手に書けるようになったら、書き直して、また読んでもらえばいいじゃないか。」

「そうか、そうだよね。そうすれば、今少しでも気が楽になった人が、将来またさらに心穏やかになれるわけだね。」

「そういうこと。その方が2度おいしくて、お得だろう。」

「ホントだね。(笑)」

「素晴らしい結果を目指すばかりに、失敗を恐れていると、何もことは進まない。そうこうしているうちに、みんな、あきらめてしまうのさ。」

~~~~~

「赤リボン・・・、ちょっと・・・いいかな・・・」

「どうした、ライ。浮かない顔して。」

「それがさ、やる気がでないんだ。」

(ガクッ！)

「またか。よくそれだけ、やる気にならない方法を見つけるもんだな。ライは『やる気出ない病』の達人だな。その専門書を書いたらどうだい。」

「そう言うなよ。僕もほとんど嫌になっちゃっているんだからさ。」

「で、何でやる気がでないんだ？」

「その理由が分からないから、こうして赤リボンに相談に来たんじゃないか。」

「あっ、そりゃそうだ。失礼、失礼。」

「もう、頼むよ。」

「OK。頼まれた。どんな感じか、話してみな。」

「え～とね、みんなが喜んでくれる妄想もバリバリしたし、そもそも何で物語を書くのか、ちゃんと思いついて、今できることをやって行こうと心に決めたんだよ。

でも、何かやっておもしろくないんだ。」

「あ～、そこにはまったか。」

「えっ、もう赤リボンは、僕のやる気が出ない理由が分かったの？」

「分かるさ。俺を誰だと思ってるんだ。ヤリがいの赤リボン様だぞ。」

「（なんか、むちゃくちゃ威張ってら。）」

「何、何か言ったか？」

「いや、何も言っていないよ。赤リボンは、ホントすごいね。」

「エッヘン、そうだろう。よし、今日も特別に、ライにはその秘密を教えてあげるぞ。つまりな・・・」

「うん、つまり・・・」

「ライは・・・」

「うん。・・・なに？」

「おもしろくないんだ。」

「・・・赤リボン。そんなことは分かってるよ。おもしろくなくて、やる気にならないから、相談に来たんだよ。そう言ったでしょ。」

「まあ、聞けよ。ライはおもしろくない・・・と、言ってるだけだろ。おもしろくない理由は、おもしろみ・・・なんだぞ。分かるか？」

「えっ、何それ？おもしろくない・・・おもしろみ・・・それって、同じようなことじゃないの？」

「ちがうよ。おもしろみを分かってないから、おもしろくないんだ。ライは物語を書きたくて書き始めたのに、おもしろくなくなっちゃったわけだよな。」

「うん、そうだよ。」

「みんなが喜んでくれる妄想もバリバリしたおかげで、やる気を取り戻せたわけだけど、これは相手のための喜びなんだよ。」

「それじゃ、だめなの。」

「いや、だめじゃないよ。それもとっても大切なことだ。ただ、自分のおもしろみを、見失ってしまったんだよ。」

「自分のおもしろみ？」

「そう、自分のおもしろみ。
相手を喜ばせるというのは、言うなれば相手と関わるおもしろみ。
みんなにほめられたり、感謝の言葉をもらうイメージをして、
やる気が出ただろ。今度は、自分一人で作業する段階での喜び、
おもしろみをしっかりとイメージしたいんだ。」

「う～ん、分かるような、分からないような。」

「ライはみんなに物語を読ませてあげることがを妄想して、その喜び
でやる気が出たわけじゃないか。でも、物語を書く作業自体に、お
もしろみを見いだせなくなってしまうっているんだよ。」

「う～ん、言われてみればそんな気がするよ。」

「そうだろ。物語を書いていること自体が、おもしろい！！、たの
しい！！って、感じじゃないだろ。」

「うん」

「だから、エネルギー不足になっちゃうんだ。
エネルギー不足ということは、やる気が出ないということだよ。」

「そうだね。そのとおりかもしれない。じゃ、どうしたらいいかな
あ。」

「自分のおもしろみを見つけることだな。」

「え～、そんなこと考えたこともなかったよ。
僕のおもしろみって、何だろう？赤リボン、教えてよ。」

「まずは自分で考えてごらん。」

「ライ、自分のおもしろみ、分かったかな。」

「ううん、よく分からないよ。物語を書くことは、決して嫌いじゃ
ないよ。だから、書いてるつもりなんだけど、それじゃ、ダメなん
でしょ。」

「ライがおもしろいなら、それでいいさ。だけど、おもしろくないなら、ちゃんとおもしろみを認識した方がいい。」

「おもしろみか・・・？ぜんぜん、分からないや。」

「たとえば、おもしろみって言うのは、こんな感じだよ。書いていることで、文章が上達するおもしろみがある。」

「えっ、それがおもしろみ？」

「そうだよ。上達することに意識を向けたら、書けば書くほど文章が上手くなる、だから、書くのがおもしろいじゃないか。」

「う～ん、たしかにね。そうかもしれない。」

「でも、これはライには当てはまらないみたいだ。」

「合う合わないがあるんだね。」

「そうだ。チャレンジしているなんていうのもある。」

「チャレンジ？」

「今までやったことがないものに、チャレンジしているんだ・・・、と言う意識を持っていると、おもしろく感じる人もいる。」

「たしかに、そうだね。新しいことにチャレンジしているんだ、って、思うとワクワクして、物語書くのが楽しくなるかも。」

「ほら、おもしろみが分かると、なんかエネルギーがでてくるだろう。」

「ほんとだね。おもしろみって、おもしろいね。」

「おもしろみだからな。ハッハッハ。新しいことにチャレンジする・・・、そのおもしろみはライにやる気を出させるみたいだけど、

さらにエネルギーアップするおもしろみが、ライにはあるみたいだな。」

「へ～、赤リボンは何でも分かるんだね。」

「ライのことなら、なんでも分かるさ。俺はライの心だからね。」

「そうなの？ふ～ん。」

「ライ、伝える・・・なんてのは、どうだ？」

「伝える・・・、それがおもしろみ。」

「そうだよ。みんなが気づいていないことを、みんなが分かるように、工夫して、丁寧に伝える・・・、そんな他の人がやっていないことを、やっていると思ったら、エネルギーが出てこないか。」

「う～ん、たしかにね。これまでに、他の人がやっていたって不思議じゃないけど、まだ誰もやっていない。そんなことをみんなに伝えられるように、内容を丁寧に練り込み、伝え方を工夫しているわけだね。」

「そう、そう。そういうこと。」

「そう考えると、物語が書き上がって、みんなに読んでもらうことを想像しながらも、今、実際に書いていることが、おもしろく感じられるね。ほんとだ、これすごいよ。」

「だんぜん、エネルギーがでてきたな。よし、よし。」

「あのさ、・・・ちょっと、気になってたんだけど。」

「んっ、なんだ。」

「赤リボンさ、ときどき、しっぽみたいなのが、おしりから見え隠れしていない？ それ、しっぽだよな。」

「あ～、これか。見えてた？ そうだよ、しっぽだ。」

「なんで？ 赤リボンはやりがいだろ。貝にしっぽって、変じゃない。」

「見た目は貝だけど、中身は貝じゃないよ。」

「えっ、どういうこと？」

「俺はライの心だ・・・、って言っただろ。ライがやる気になったと言うことは、ライの心には何があると思う？」

「やる気になった、僕の心の中に、・・・何があるか？」

「そうだ。その心の中の動きに反応して、俺は変化しているんだよ。だから、最初は人を傷つけるヤリだった。それから、ライの心に反応して思いやりになり、やりがいになった。今は、何に変化していると思う？」

「え～、どういうこと。全然、分からない。」

「ライは今回の物語を書くことで、一生懸命、やる気を出そうとしてきただろ。」

「うん」

「ライの心の中には、『やりたい』って気持ちが今はあるじゃないか。やりたいことを考えているから、やる気になってるんだよな。」

「なるほど、なるほど、・・・で、・・・なんで、しっぽ？」

ジャ～～～ン

「うわっ、赤リボンが・・・、やりがいの中から、魚が出てきた！！
なに・・・、タイ?!」

「そう、ライの心に反応して、
俺は・・・、『やりタイ』 になっているのさ。」

チャンチャン。 おしまい。

【作者からのメッセージ】

この物語で様々な気づきを得て、自分なりに日常生活に活かしていただけたら、大変うれしく
思います。この物語を読んだ方々が少しでも気持ちが穏やかになり、争いのない世界をみんな
で創っていただけることを願っています。

全世界のできるだけ大勢の人達に読んで欲しいと思っていますので、コピー、配布に対する
制限は一切ありません。どうぞ、ご家族、お友達にプレゼントしてあげてください。

絵 / みかん

・・・オフィス・ミナコ・・・

みかんの似顔絵名刺屋さん☆

PC→ <http://mikan-o.sakura.ne.jp/>

携帯→ <http://mikan.mobi>

小熊 ミナコ oguma minako

作 / じーこ

・・・歯と心と人生の専門家・・・

人生ドクター 澤田 宏二

Sawada Koji

リアルアイセミナー <http://jicolize.com/>

総入れ歯ドットコム <http://www.souireba.com/>

見えないやりかたの使い方

